『教育への扉』　竹谷出版学術ジャーナル（第４巻　第１号）　ISSN 2436-4959

（寄稿）

子ども理解を中心に据えた授業構築を目指して
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的実現のために～

高橋　純一（たかはし　じゅんいち）
東京未来大学　講師

1975 年 秋田県秋田市生まれ。秋田県立秋田高等学校を卒業後，北海道教育大学函館校に入学。卒業後北海道の公立中学校を中心に，約 20 年間教員を務める。中学校教員在職中に，北海道教育大学修士課程を修了。現在，東京未来大学こども心理学部において主に，社会科教育関連科目を中心に担当している。

１　我が国の教育動向

近年の我が国の教育動向から，子ども一人ひとりを理解して授業を構成し，実践することが重視されている。

我が国においては，令和３年４月に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」[1] が出され，個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることが提起されている。このことから，学校現場において子ども一人ひとりを理解し，その子どもにとって最適な学びを実現できる教師の資質・能力がいっそう求められる。近年，教科教育学の立場からも臼井（2022）の言説として，「授業をする力量だけでなく，授業を通して子どもの力を伸ばす力量」[2] の獲得が述べられている。そのため，各教科等の授業において，子どもを理解しその能力を最大限に伸ばすことを視野に入れながら，授業実践することが望まれている。筆者の所属する東京未来大学のこども心理学科こども保育・教育専攻においても，カリキュラム・ポリシーの一つに，「子ども理解に根ざした心理学・保育学・教育学・福祉学等に関する体系的・実践的な知識・技能を学ぶ」を掲げ，教育課程の根幹に「子ども理解」を据えている。本稿は，我が国の教育動向等を見据えて，子ども理解をキーワードにしながら展開していきたい。

２　子ども理解を中心に据えた全国屈指の研究校

我が国において，長年にわたって子ども理解を柱にして，実践研究している学校の一つに富山市立堀川小学校がある。堀川小学校は，戦後の社会科を創造した重松鷹泰の指導を仰ぎ，1955 年より現在まで一貫して子ども理解を中核とした問題解決学習を実践している。また，創校 150 年を迎えた伝統校であり，教育目標として「自主創造－くらしをみつめ，追究する子ども－」を掲げ，“子どもが主体的にくらしをつくる”ことを目指している。特に，当校の子どもが主体的に語り合い聴き合う授業は魅力的であり，毎年行われる教育研究実践発表会には，全国から多数の教育関係者が参加している。堀川小学校の子どもを主体とした研究の成果について，これまで著書として 14 冊刊行されている。1959 年に発刊された第１の著書『授業の研究』のはしがきには，堀川小学校における子ども理解の考え方が示されている。

「ひとりひとりの子どもの考えには，それぞれに根拠がある。どんなつまらない発言の中にも，その子どもの過去の学習経験や生活経験が織り込まれているのであって，どの子もどの子も，それぞれに，その子なりに独自な考え方の背景を背負って，個性的に問題に対決しているのである。学習指導は，まず，このような，子どもの考え方の特質を認め，その言い分をすなおにききいれることからはじめなければならない」[3]

堀川小学校は，この考え方に基づいて子どもを主体とした授業研究を展開してきたのである。次章では，この子ども理解に基づいてどのような授業が展開されているのかを取り上げる。

３　堀川小学校の社会科の授業実践

筆者は現在，堀川小学校の政二亮介教諭の実践について研究している。その中でも本章では，政二教諭が堀川小学校に在籍して４年目に実践した小学校６学年追究単元『戦国の世を生きる－徳川家康－』を取り上げる。本単元の流れは，表１のとおりである。

表１　単元『戦国の世を生きる－徳川家康－』

①　単元名，肖像画，年表から既知の知識や疑問を契機に，戦国時代や徳川家康の人物像について気になることを明らかにする。
②　徳川家康の業績や生き方を基に戦国時代を詳しく調べることで，徳川家康の願いや働きについて自分の考えを確かにしていく。
③　徳川家康の業績や生き方，変化した社会の様子を基にしながら，徳川家康が果たした役割について自分の考えをまとめる。

（堀川小学校研究紀要第 86 集『個が育つ教育経営－子どもの追究を拓く教育－』，87 頁より筆者抜粋）

表１にある①は，新単元との出会いの段階である。堀川小学校では「提示の時間」と言い，子どもが学習に見通しをもち，追究を歩み出していく上で大事にしている段階である。提示の時間において家康の年表を見た児童Ｉが，徳川家康が名前を変えていくことに興味をもった。つまり，「徳川家康の年表見たときに，別の名前で生まれてきていることが気になりました。なぜなら，今は，名前をよくしようと名前を決めているけれど，昔はなぜ名前を変えるようなことをしたのか気になりました」[4] という問題意識をもったのである。政二教諭にとって，Ｉのような家康の名前に問題意識をもつことは，単元構想にはなかったものの，家康の名前にこだわるＩの背景を考え，Ｉ自身の名前の由来やその真意を親から聞き，自分の名前に込められた親の思いや願いを知ったこと（Ｉが昔自身の名前について嫌な気持ちをもち，そのことについて親に訴えたところ，親から名前に込められた願いを聞き，それ以降嫌がることはなくなった）と因果関係があるとその背景に迫っていったのである。

また政二教諭は，本単元におけるその後のＩの追究について，以下のように振り返った。

「Ｉさんが急に手を挙げてきて，『先生私ももしかしたら，（家康と同じで）卑怯なことしていることあるかな』って，いきなりボソって言うんです。『何かあったけ』って言ったら，『私テニスやっているんだけどさ，人に試合勝ちたいなって思ったら，はじっこの方ばかりにボール打つって。』それはすごく良いことなんじゃないかって僕なら思うんですけど，…それって，Ｉさんからしたら，自分ももしかしたら試合に勝ちたいっていう時に，卑怯な手を使ったりすることあるなっていう話を，自分事にしながら考えていくんですね。…この徳川家康を通していきながら，自分の立場や生き方というものを顕在化しているのではないかと思いました。」[5]

以上のように政二教諭は，Ｉが徳川家康の生き方を自分事として捉え，追究する姿に対する理解を深めていった。また，Ｉの学びが学級全体に及ぼした影響についても以下のように振り返った。

「徳川家康が，戦国の世をどう生きてきたのかについて，他の子どもはその業績しか注目しなかったんですけど，Ｉの追究によって名前からも人の生き方の矛盾があることに全体が気付き，学習が深まる良い追究になった。」[6]

Ｉの追究が，学級における他の子どもの学びを深めるための契機となったのである。

以上のことから，本授業実践を，Ｉが教材を通して生まれてくる課題を発見し，それを解決する過程としてのみ捉えることはできない。Ｉは，この教材を通して徳川家康の名前の変遷から，自分の価値観と矛盾したり，抵抗を感じたりして苛まれ，自身の問題として捉えるに至った。そしてＩは，自分の問題として捉えたものと正面から向き合い，問題解決に向けて主体的に追究していった。

このＩの主体的な追究を可能にした根拠は何であろうか。筆者は，政二教諭が名前の価値や意味，家康の名前の変遷にこだわったことに着眼したＩを見守り，その追究を最後まで信じて支えながらＩを理解しようとしたその姿勢にあると考える。

４　子ども理解を中心に据えた授業実践

前章でも述べた徳川家康の授業実践に着目して，もう少し述べていきたい。

本授業における徳川家康が江戸幕府を開くまでの業績に関わることは，教科の内容面に該当する。徳川家康という教材を通して，子どもはその時代背景や文化,政策等について理解し,学習を深めていく。言わば，教科の内容的な側面としての意味をもつ。しかしながら本授業実践は，この内容面を扱うだけにとどまらなかった。つまり教師は，教材を通して浮かび上がってくる子どもの様々な事実を捉えること，その子どもの事実と事実をつないで統合して，子どもの育ちや願いや価値観を捉えるようとする努力しようとすること，つまり子ども理解に迫るという内面的な側面をも大事にしていると言える。子どもの内面的な側面も位置付けながら授業が展開されることによって，子どもが主体的な追究を生み出すことにつながっているのである。

このことは，堀川小学校の追究の捉え方にも関係している。例えば，第５冊目の著書『個の成長』では，追究について以下のように述べられている。

「追究とは，求めてやまないすがたであり，真実にむかって全力をあげて究めようとすることである。わたくしたちの求めている教育は，そうした追究主体の育成である。追究はしたがって全人格的な行為であり，人生における永遠の旅は，すなわち追究のすがたである。わたくしたちは，可能性にみちた子どもたちが，教育という営みを通して，追究者として育つことを願わずにはいられないのである。」[7)]

このことは，追究が単なる授業という限定された場における学習内容の獲得ということを意味してはいない。子どもが自らのくらしに重ねて，自分の問題として向き合い続けること，すなわち生き方に関わることとして捉えられ，教師がその子どもの追究を支援していることに要因がある。

５　自立した学習者を育成するために

１章で述べたように，現在の我が国の教育動向を受けて，各学校現場において子どもを「自立した学習者」に育成することが期待されている。

堀川小学校では，1978 年に刊行された第６冊目の著書『自立性の開発』において，子どもが自立して学ぶための支援として４点について述べられている。１点目は学習意欲を育てること，２点目は学習方法を工夫していく力を育てること，３点目は自己評価の力を育てること，４点目は他への関わり方を高めることである [8)]。今後，個別最適な学びと協働的な学びを一体的に実現するうえで，各学校現場に示唆を与えるであろう。

堀川小学校が約 70 年間にわたって,子ども中心の学校であり続けることができるのは，時代とともに変化していく教育の姿を敏感に受けとめ，創造的な学校経営に努めてきただけではない。どれだけ時代が変化しようとも学校経営の中核に子どもの内面を重視し理解することを貫いていることが根拠として挙げられる。第 10 冊目の著書『子どもの学びと自己形成』には，以下のようなもつべき教師の姿勢について述べられている。

「教師は日頃から子どもに教えようとする教科の内容的な教材研究を十分に行い，子どもの幅広いニーズに応えるべく，内容に精通していることが必要である。それとともに大切なことは，教師が子ども一人一人を熟知し，子どものよき理解者としての姿勢を失ってはいけないことである。」[9)]

筆者は今後とも，この不易と流行の両面を兼ね備え進化・発展し続けている堀川小学校の教師と子どもから学び，その研究の発展のために，微力ながら全力を尽くしていきたい。

註及び引用文献

1)　文部科学省（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm（最終アクセス 2024 年２月 25 日）。

2)　臼井智美（2022）「教師教育における教科教育学（研究）の寄与の可能性」『日本教科教育学会誌』第 44 巻第４号，2022 年，103 頁。

3)　富山市立堀川小学校（1959）『授業の研究－子どもの思考を育てるために－』明治図書，３頁。

4)　富山市立堀川小学校（2016）『教育実践－個の学びと教育－第121号』富山市立堀川小学校教育実践研究会，15 頁。

5)　2018 年 7 月 31 日に，福島大学教職員研修講座（『子どもの追究を拓く授業』」）の講師を担当した。その講演会で語ったこと。

6)　2019 年 6 月 1 日，堀川小学校において，筆者のインタビューによる。

7)　富山市立堀川小学校(1973)『個の成長－可能性の開発を求めて－』明治図書，10 頁。

8)　富山市立堀川小学校(1978)『自立性の開発』明治図書，12－13 頁。

9)　富山市立堀川小学校(2006)『子どもの学びと自己形成』明治図書，43 頁。

竹谷出版学術ジャーナル『教育への扉』

第４巻，第１号

発行日：2024 年 6 月 19 日

発行元：竹谷出版（竹谷教材株式会社出版事業部）